

「光の子として歩もう」

エフェソの信徒への手紙 5:6-20
ヨハネによる福音書 12:27-36

2023年10月15日
野村 友美 師

<暗闇と光>

皆さんは、「ひかりひかり」という子ども賛美歌をご存知でしょうか？

こんな歌です。

♪ ひかり、ひかり、
わたくしたちは光の子ども、
光のように 明るい子ども、
いつも明るくうたいましょう。
ひかり、ひかり、
わたくしたちは光の子ども、
光のように 元気な子ども、
いつも元気で遊びましょう。
ひかり、ひかり、
わたくしたちは光の子ども、
光のように 正しい子ども、
いつも正しく励みましょう。

今日の聖書の言葉を読むとき、私はいつもこの「ひかりひかり」の賛美歌を思い出します。

「あなたたちは以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています。
光の子として歩みなさい。」

使徒パウロはそう言って、彼の手紙を読む教会の人たちに語りかけています。あなたたちは以前は暗闇の中にいた、というんじゃないんです。

あなたたち自身が暗闇だった、とパウロは突きつけます。

神様の愛を知らないでいた時、神様の愛を受け取らずにいた時、イエス・キリストと自分には関係ない、と思って生きていた時。あなたたち自身が暗闇を作り出していた、とパウロは言うんです。

私たちの「暗闇」、この世界の「暗闇」って、何でしょうか。

ある日突然、それまでの日常が壊されて、人の命と尊厳が理不尽に奪われていく、戦争。

人間の力が及ばない、予測も満足にできない、災害。今この時にもあちこちで起こり続けている、痛ましい事件や事故。そんなニュースを聞くたびに、私たちは「暗闇」をひしひしと感じずにはいられません。どうして、こんなことが起こるのか？この世界は一体どうなっていくのか？私たちの進む先に、希望はあるのか？

知れば知るほど、考えれば考えるほど、絶望の暗闇が私たちの心を重たくさせます。

そして、この「暗闇」を作り出しているのは決して、限られた特殊な人たちだけじゃないことも、私たちは経験として知っています。

誰かを傷つけたり、無視したり、理不尽に扱ったり、自分を満たすために利用したことが一度もない人は、いないでしょう。私たち人間の誰もが、多かれ少なかれ、どこかに「暗闇」を生み出さずにはいられないものなんです。

しかし今、あなたたちはイエス・キリストに結ばれて、光になっている。そうパウロは宣言します。

闇が消えた訳じゃない、暗闇は今も確かにある。しかしあなたたちは今やイエス様に結ばれて、イエス様によってその暗闇を追い払う「光」だ。だから光の子として歩みなさい、とパウロはこの手紙を受け取るすべての教会に向かって呼びかけているんです。

<「光の子となりなさい」とイエスが言われた>
光の子として歩みなさい。

このパウロの言葉は、イエス様の言葉から受け継がれているものです。今日はご一緒にもう一箇所、聖書を開いて読みたいと思います。

ヨハネによる福音書12章27節から36節までお読みしましょう。

この場面は、イエス様が「今、わたしは心騒ぐ」と言われたところから始まっています。

元の言葉を直訳すると、「私は不安だ、動揺している」とイエス様は まず言っておられるんです。この時のイエス様は、いよいよ間近に迫ってきた十字架での死を思って心を騒がせられた、つまり不安で怖くてドキドキしておられた、ということをやヨハネによる福音書は伝えています。

イエス様がイスラエルの指導者たちに捕らえられる直前、ゲッセマネの園で

「できればこの杯を取り除けてください、助けてください」と神様に祈られたことはよく知られています。あのゲッセマネの園での祈りの前から、

イエス様はもう十字架にかけられる不安と恐さに向き合って、戦っておられたんです。

どうしよう、父である神様に私を救い出してくださいと言おうか。いや、しかしわたしはまさにこの時のために来たのだ。父よ、あなたの栄光を現してください。

そう言って、不安で怖くてドキドキしながら、それでも神様に従っていこうと決意なされたイエス様に、天からの声が応えました。

「わたしは既に栄光を現した。

再び栄光を現そう」

この時、イエス様は一人でおられんじゃなくて、群衆に囲まれていました。ですからイエス様のそばにいた人たちにも、この天からの応答は聞こえたようです。

人々は「雷が鳴ったんだ」とか「天使が語ったんだ」とか、それぞれが受け取りたいように受け取りました。それでも、この神様の応答はイエス様のためじゃなくて、彼らのためなんだ、とイエス様は言っておられます。

人々がどんな形で受け取るにしても、イエス様がそこにおられることそのものが、神様の栄光を現している。神様の光で人々を照らしている。

そして、これから起こるイエス様の十字架と復活の出来事が、改めて神様の光でみんなを照らすことになる。そう宣言しておられるんです。

イエス様の十字架での苦しみと死によって、すべての人の罪を赦す。そう決断して、神様は独り

子のイエス様を人間としてこの世界に生まれさせられました。

イエス様でさえ、不安と怖さを感じずにはいられない、十字架での死。それは体の痛みだけじゃなくて、心の痛みも味わい尽くす死に方です。何も悪いことはしていないのに、人々から見下されて、尊厳を奪われる屈辱。神様からも、周りの人たちからも見捨てられてしまう、孤独と絶望。それが、十字架での死がイエス様にもたらすものでした。

神様の愛を無視して、自分の思いや欲求に自分自身を支配させる、そんな罪に縛られて生きる限り、この十字架での死がもたらすような痛みと屈辱、孤独と絶望の暗闇に、誰もが結びつけられています。

みんな自分だけは大丈夫と思いながら、それでもいつやって来るかわからない不安と怖さから、どうしても逃れられない。そんな罪の暗闇を光で照らすために、イエス様は来られました。神様がすべての人を愛して、暗闇から救いたいと願って、イエス様にこの暗闇のすべてを背負わせて、私たちの罪の代償を代わりに支払われたんです。私たち人間の罪がもたらす痛みと屈辱と孤独は、イエス様の十字架によって、もはや「私たちが受けるべき報い」ではなくなりました。

だから、私たちが痛んだり、辱められたり、孤独を感じる時に、神様はそれを「当たり前だ、自業自得だ」とは絶対におっしゃいません。嘆き苦しむ一人一人を深く憐れんで、寄り添って、慰めたいと願ってくださいます。

「もうその暗闇を歩く義務はあなたたちにはない、それはわたしが取り除いた」と神様はイエス様の十字架を指差して、私たちに向かって宣言しておられるんです。

それだけでは終わりません。

「わたしが地上から上げられる時、すべての人を自分の元へ引き寄せよう」とイエス様はここで言うておられます。

十字架での死によって、私たちが自分で背負うべきだった罪の責任も死なせてくださったイエス様は、その死から復活されたことで私たちにも新しい復活の命を差し出しておられます。

罪の暗闇を生きる命から、神の愛の光を生きる命へ。体と一緒に死んでいく命から、復活させられて神の国を生きる命へ。

「わたしがすべての人を引き寄せよう」とイエス様は言われました。十字架での死から復活して、父なる神様と一緒にいるために天に昇られたイエス様は、今も聖霊を通して私たちとも一緒におられます。

聖霊が働く教会を通して、すべての人をご自分の元に引き寄せて、神の国の命へと招いておられます。

暗闇の中を歩く者は、自分がどこへ行くのか分かっているつもりで分からないまま、ぶつかり合ってさまよう者です。この地上での死をゴールにして、お互いの罪に痛んだり傷ついたり悲しんだりしながらさまよう必要は、もう誰にもありません。そんな罪の暗闇を歩く責任は、もうイエス様が十字架につけてくださいました。

だからあなたたちは、光の中を歩きなさい。
神様がご自分を犠牲にするほど愛してくださっているんだから、この愛を受け取って、神様と生きる平安を選び取りなさい。

神様の愛に照らされて、神の国を目指して歩く、光の子になりなさい。イエス様のこの言葉を受け継いで、パウロは今日も私たちに、すべての教会に向かって呼びかけます。「光の子として歩みなさい」と。

<光の子として生きよう>

イエス様からパウロに受け継がれた言葉。

「光の子として歩みなさい」というこの呼びかけを受け取った私たちは、この言葉を受け継いで、また呼びかけるように招かれた者です。

光の子として、神様の愛で足元と行く先を照らして、それぞれの人生の旅路を歩いていくために。そして出会わされる人たちに、光の在りどころを伝えるために。聖霊が今日も、私たち一人一人をこの教会という場所に呼び集めました。

ところで、「光の子として歩む」と言ってもどうしたらいいのか、何だか漠然としていますよね。

大丈夫、パウロはとても行き届いた良い先輩です。光の子としての具体的な生き方を、パウロは今日の箇所の最後に挙げています。

賢い気配りを忘れないようにしなさい。

悪い時代にただ絶望していないで、この時代だからこそできる良い行動を探し求めなさい。

神様が喜ばれることに心を向けなさい。

他の何かで自分を満たそうとするんじゃなく

て、神様からの恵みに目を向けて信仰の仲間たちと一緒に感謝の歌をささげなさい。

そう言ってパウロは私たちに、信仰の後輩たちに呼びかけているんです。

光の子として生きるその姿で、周りの人々に光の明るさを知らせなさい。周りの人たちを温かく照らす、神様の愛の光として生きなさい、と。

暗闇が重くのしかかるこの世の中で、私たちはせいぜいろうそくや豆電球ぐらいの光にしかたれないのかもしれませんが。

私たちにできることは本当にささやかで、小さな私たちの愛は誰の目にも留まらない時だってきっと多いでしょう。それでも、どんなに小さくてもささやかでも、それは確かに暗闇の中で輝く「光」です。

不安と恐れの間を追い払う灯火として、人々に神様の愛を知らせる目印として、聖霊が私たちの小さな光を、明るく輝かせてくださいます。

ひとつひとつは小さな光でも、集められれば、照らせる場所はさらに広がるでしょう。

だから私たちはこうして集められて、「光の子として歩みなさい」と日曜日ごとに一緒にここから送り出されるんです。さあ、行きましょう。

すべての罪の暗闇が追い払われる、その日まで。神様の愛に導かれて、神様の愛で足元を照らしながら進む光の子として、新しい週もそれぞれの日常を恐れず歩いていきましょう。

お祈りいたします。